あの日の空

夏実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの日の空

【Ｎコード】
Ｎ６５９５Ａ

【作者名】
夏実

【あらすじ】
毎日退屈で死んでもいいと思ってる岡夏美。そんな時一人の転校生がやってきた。そいつとの出会いは偶然ではなかった。

プロローグ

とうとうこの日が来てしまった

時間は止まってくれなかった

幸せな人生だったなぁ

生まれかわったらまた会えるといいね

いや、違う

生まれかわったら会う

絶対に…

さようなら

会うのはずっと先になるけど

会える日を楽しみにしてる

出会い

あぁ――――だるぅ

これ、私の口癖になってきた。

なんだろ??この脱力感。なんにもやる気しない。

岡　夏美は高校2年生。将来のコトはなにも決まっていない。見た目はそう悪くない。派手だが結構思いやりがある。が、しかし今は何もやる気が起きないのだ。

「いっそのことこっから飛び降りちゃぉぅかなぁ。」

屋上で空を見上げながら言った。

朝のＨＲ。

皆にあいさつをされながら夏美は思う。

「今日もくだらない1日が始まる。憂鬱。」

仕方なく席に着き、ため息をつく。いつもの日課。

先生が教室に入って来た。ただでさえ暑い7月の教室なのにこんなにむさ苦しい先生が入って来ちゃ教室の厚さは倍増するに違いない。

この先生が存在するから地球温暖化が進むのね。

心の中で笑ってみる。

「皆おはよう！！！！今日も暑いな。」

先生が無駄にデカイ声で叫ぶ。

この厚さはお前が原因だっつーの。

「今日は皆に報告がぁる！！このクラスに転校生がくることになった！！！！」

教室がザワつく。無理もない。転校生が来るとなると誰かがどこからともなく噂を嗅ぎつけ広がるはずだ。が、今回はそれがなかった。

さすがの私も動揺した。

「ぉい！！！！入ってこい！！！！」

さっきにも増してデカイ声で叫んだ。

「失礼します。」

教室は静まりかえった。

何この男…

その男は夏美同様派手だがかっこいい男だった。

しかしどこか不思議な雰囲気を持っていたのだった。

切なさ

「初めまして。〇〇県から来た、田中東弥です。よろしく。」

簡単なあいさつをすませた。もうクラスの女子は騒ぎ初めていた。

「皆仲良くしろよ。んじゃ、田中の席は…おっ！！！あそこが空いてる。あそこに座れ！！！！」

一番後ろの一番窓側が東弥の席になった。その横が私…。

「よろしく。まだ何もわかんないから色々と教えてね！！！」

さっきとは打って変わって明るい。その声は懐かしいような気がした。なぜかほっとけない感じがする。

「うん。よろしく。困ったら何でも聞いていいよ。」

「やっぱり変わらないね。夏は…」

「何か言った？？？」

「なんでもないよ。」

夏美と東弥は席が近い所為かすぐに仲良くなった。
話もよく合うし、いっしょにいて落ち着く。1ヵ月もすると何でも話せる相手になっていた。

「私、やりたいコトが見つからないの。もう死んでもいいって思ってた。」

「過去形？？？」

「過去形だよ。今はもうそんな気持ち薄れてる。東弥が色々相談乗ってくれたから楽になれた。」

「そっか…良かった。」

2人はいつも屋上で話す。夏美は空が大好きだ。それは偶然にも東弥も。
カラッと晴れた日が2人とも好きだった。
しかし夏美は切なくなる時もある。理由はわからないがとても悲しい。涙が出た時もあった。

「もう完璧夏だね…」

その夜不思議な夢を見た。頭にこびりついて離れない夢を…。
こんなに繊細に覚えていて少し気味が悪かった。

悪夢

「い……で、い…ないで、いかないで！！！」

真っ暗闇でひたすら叫ぶ私。
誰に向かって言ってるの？？

「お願い…。あなたがいなくなったらどうすればいいの？？」

いつのまにか私は泣いていた。めったに泣かない私が大粒の涙を大量に流していた。

よく見るとずっと先の方に誰かいる。

「行っちゃダメ――！！！」

その人を見るなり叫んだ。そして走り始めた。

「お願い待って！！！」

必死に走る。が追い付けない。その人は歩いているのに…。

やっとの思い出追い付き、手をのばしたその時、目がさめてしまった。

パジャマは汗でぐっしょり、顔は涙でぐっしょり濡れていた。

なんだったんだろ？？？やけにリアルな夢だった。この夢のコトは忘れていない。それほど印象深く残ったのであろう。
夏美はこの夢をすごく恐いものだと思った。悪夢だと…。

この夢を見るのは何回目だろう。
恐くなった私はその夢のコトを東弥に話した。するととても悲しそうな顔をして聞いてくれた。

「それで…その先は？？？」

「わからない。いつも同じ所でおわるんだ。」

「そっか…。」

おかしい。いつもと違う。いつもだったらもっと大きいリアクションで励ましてくれるのに。

こいつ何か知ってる…。

その日の夜もまたあの夢を見た。

「またこれ…。」

しかしいつもの夢とは大きく違った。

夏美はこの夢の最後がわかってるので追い掛けようとしなかった。

「今日は上のほうが赤い。」

するとあの人が出てきた。その人はいつもは背中をむけてるのに今日はこっちを向いて立っている。

よく目をこらして見てみた。

「夏…」

!!!!!

そこで目が覚めた。

「あれは…東弥…。」

催眠

なんで東弥が???

東弥は泣いていた。

なんで東弥がいるの????

目が覚めた。

急いで学校へ向かう。
もう間違いない。東弥は何か知っている。
なぜだか気になって仕方ない。

「東弥…。」

「夏美おはよう。」

「東弥!!!あんたは何を知ってるの???何かおかしいよ。今日なんか夢に出てきた。もう…私の中ごちゃごちゃにしないで。」

この話題だと普段出ないような感情が出てしまう。

「わかった。話すよ。ケド俺が知ってるのは少しだけなんだ。」

東弥は話始めた。

俺たちは前に会ったことがある。でも夏美と東弥ではなく、夏と冬也として。

時代は昭和時代。幼なじみみたいなんだ。ケド離ればなれになった。理由はわからない…

「それは誰から聞いたの？？？」

「催眠療法だよ。」

東弥も夢に悩まされていた。何回も同じ夢を見るから催眠療法をしたのだった。ここまでしかわからないのは記憶が足りないから。と先生に言われた。だから夢に出てくる女の子を探していた。そんな中、父の転勤で転校した学校に夢に出てくる女の子そっくりな夏美がいたのだった。

「俺たちの出会いは運命なんだろうな。」

「…行こう。」

「えっ！！？？」

「催眠療法しにだよ。私の記憶がそばにあればわかるかもしれないじゃん。…私知りたいの。こんな夢見るぐらい未練があるんだよ？？ウチらでなんとかしてあげようよ！！！！」

「そうだね。よし！！行こう！！！」

真実

私たちは急いで東弥がやった催眠療法をしにでかけた。以外とここから遠かった。片道2時間ぐらいかかってしまった。
やがて病院が見えた。

「あれ???東弥君じゃないか。久しぶりだね。また夢に悩まされているのかい??」

東弥はすべてを説明した。

「そうか。君が夏の生まれ変わりの夏美ちゃんだね。2人とも会えて良かったじゃないか。真実がわかるよ。さぁ、そこの2人用の椅子にすわって。」

椅子にすわり、東弥は言った。
「言うの遅くなってごめんな。夏美の運命を変えたくなかったんだ。」

「いいんだよ。こうなるのもきっと何かあったからなんだから。私は言ってくれて嬉しかった。」

「それじゃぁ始めるよ。ゆっくり目を閉じて…」

「冬也！！！いっしょに学校行こう。」

「早く来いよ。」

昭和〇〇年
冬也と夏は学生だった。今で言う高校生。第二次世界大戦の真っ只中で空襲など危ないめにあっているが2人とも幸せだった。ずっといっしょにいられたから。

「最近戦争もひどくなってきたな。」

「…うん。すごく空襲が多いね。」

「俺も…行かなきゃいけないのかな。」

「冬也は大丈夫だよ。そんなパッパラパーには頼らないってぇ。」

「ひどいなぁ。」

わかってるんだ。
日本は負けてるってコト。

物資が足りないってコト。
兵隊がいないってコト。

そろそろ冬也がいなくなるってコト。

私無理して笑ってる。本当は冬也に飛び付いて泣きたいんだ。けど、
今は幸せな時を過ごしていたい。

夏が想っていることは冬也も想っていた。
2人でいっしょにいたいから。ずっといっしょにいたいから神様に
無理なお願いをしている。

戦争なんか終わってしまえばいいのに。

時間が止まればいいのに。

約束

「夏…俺、戦争に行くことになった。」

夏は頭が真っ白になった。《別れ》この言葉が心に突き刺さった。

「嘘…だ。」

「嘘じゃない。」

大人はこんな子供にまで何をさせるんだ。

「いつ…行くの???」

「明日。」

「帰ってくるよね。」

「……。」

冬也は小さく頷いた。
夏は泣きだした。

「なっなんで泣くんだよ。俺は帰ってくるんだから。

「そうだよね。」

また無理に笑う。

時間がなかった。明日にはいなくなる冬也。

「夏…今日いっしょにいてくれる？？？」

「うん。」

2人は他愛もない話をしながら歩いた。

楽しかった。明日冬也がいなくなるなんて思えなかった。2人はいつも遊んだ丘に向かった。花が綺麗に咲いていてとても空気が澄んでいる。

「うひゃー。やっぱここは気持ちいいね。」

「うん。俺ここ大好き。」

「私もだよ。思い出がいっぱい。

「突然だけど俺なぁ…夏が大好き。他の誰よりも。」

「私が先に言おうと思ってたのに。」

「やっぱり俺たちは繋がってるな。」

「すごい嬉しいよ。本当にありがとう。」

「実はさ…俺帰ってこれないんだ。」

「わかってるよ。」

「えっ???」

「だって冬也、嘘つくとき絶対声出さないよ。嘘だってすぐわかった。泣かないように頑張ったんだけど無理だったよ。」

「そっか…。ごめん。」

「なんで帰ってこれないの？？？生きて帰ってきてよ！！！」
「無理なんだ。生きて帰ってこれない。」
「何で？？？頑張って生き残ってよ。」

夏は泣きだした。

「俺は特攻隊に入ったんだ。」
「特攻隊？？？」
「そう。飛行機に乗ったまま敵地に突っ込むんだよ。絶対に帰れないんだ。」

「何で冬也が…何で冬也がそんなことしなきゃいけないの！！！！」
「もう決まったことなんだ。俺は死から逃げられない。短い人生だったけど夏に会えて良かったよ。本当に楽しい毎日だった。悔いはないよ。夏と会えたのは運命だって信じてるから。」

「私だって運命だって思ってる！！！！名前だって夏と冬だもん。すごいじゃん。」
「本当だね。けど俺はいなくなる。夏は強く俺の分まで生きてね。そんでちゃんと結婚して赤ちゃん産んでしっかり年とって皆に見守られながら死んでね。約束だよ。」
「わかった。約束する。」

別れ

２人は手をつないで丘をおりた。夕日を背にして。
そう言えば小さい頃いつも２人でこうやって帰ったなぁ。歌を歌いながら。
夏は歌い始めた。

夕焼けこやけで日がくれて
山のお寺の鐘が鳴る
お手て繋いで皆帰ろう
カラスといっしょに
帰りましょう

２人でこうして帰るのも今日で最後。
明日の今頃にはもう冬也はいない。

ついに別れの日…
夏は眠れなかった。

「夏…俺もう行かなきゃ。」
「もう行くの???」

「うん。」

冬也はとても悲しそうな瞳だった。

「行かないで…。」

「ごめんな…俺は死んでも絶対夏を忘れない。生まれ変わっても忘れない。忘れたくないんだ。」

冬也は夏を抱き締めた。

「俺だって行きたくない。こんなことしてても時の流れの中で生きてる俺たちは流れに逆らうことはできないんだ。生まれ変わったらまた会おう。また会う時は平和で幸せな世界がいいな。ばいばい…夏。愛してるよ。」

夏からそっと離れて行く冬也。夏は何も言えない。

本当にこれでいいの？？？最後なのに。このままお別れは嫌だ。

「冬也！！！！！！！」

夏は大声で叫んだ。

冬也は足を止めてふりむく。不思議そうな顔でこっちを見ていた。

「冬也！！！私冬也と会えて良かった！！！！！私と冬也は2人で一つ。今度は2人で幸せになろう！！！」

冬也はにっこり微笑んで言った。

「おう！！」

祈り

場所は違うけど2人は同じことを想い、同じ空を見ていた。
カラっと晴れた空。まるでこの世が幸せに包まれたような空だった。
夏は丘の上。冬也は飛行機の中で。

神様…

私は　　俺は

なんで時間を止めてくれなかったのって思うよ

けど

恨んでないんだよ

だって

冬也に　　夏に

会わせてくれたから

だから恨まない。

神様…

もうひとつお願いしてもいいですか

もし

私たちが　　俺たちが

生まれ変わったら

また会わせてください

そのまた出会う世界が

今のような過酷な世界じゃなくて

平和な世界でありますように

まだまだ

私たちは　　俺たちは

やりたいことが沢山ある

けど今はできないから

我慢します

次は

大好きな人と自由に…

この時代で

いっぱい苦しんだから

この苦しみは二度と味わうことのないように

戦争を終わらせてください

冬也　　夏

また会える日を信じて

大好きだよ

冬也は死んだ。
誰にも見取られることなく…。

夏は冬也が死んだことが伝わったのかその場に崩れ落ちた。

夏は冬也との思い出を思い出していた。
今考えると冬也といっしょにいて嫌なことはなかったのかもしれな

い。

冬也ありがとう

私、強く生きるよ。

運命

夕焼けこやけで日がくれて

山のお寺の鐘が鳴る

お手て繋いで皆帰ろう

カラスといっしょに帰りましょう

初めて一人でおりた丘。

心が痛い。

けど強く生きるんだ。

冬也の分まで。

夏は学校から病院で負傷者の治療の手伝いをしろと指示を受けた。

夏はそこで一生懸命働いた。少しでも多くの人を救うために。

夏はその病院で死んだ。

病院が空襲を受けたのだった。

神様なんて気紛れ。

一生懸命な夏を殺した。

けどその分幸せにしてくれるよね。

私が神様だったらそうしてあげるよ。

夏は薄れゆく意識の中で来世の幸せを願った。

2人はここで目覚めた。

顔は涙でぐっしょり濡れていた。

「おっ！！！起きたかい。だいぶ悲しかったみたいだね。先生は内容は知らないけど君たちには良い体験になったんじゃないかな。」

2人は病院を出た。

「びっくりだね！！！私たちの過去があんなだったなんて…すごく悲しかった。私死んでもいいだなんて思って。夏と冬也に悪いことした。私が死んだら夏と冬也の苦しみが水の泡になっちゃうのに。」

「いいじゃん！！！過去が見れたから夏美の気持ちが変わった。今は死にたくない。それでいい。過去に捕われちゃだめだよ。今の俺たちは夏と冬也じゃなくて夏美と東弥なんだから。今を大切に生きよう。けど夏と冬也の想いも背負ってね。」

「夏と冬也の想い…。」

「そぅ。幸せになるって想い。2人で。俺は夏美とだったら全然かまわないよ。むしろ嬉しいぐらい。俺自然と夏美に引かれてた。スキなんだよ。」

「私もそうかもしれない。出会ってあんまり時間たってないのに東弥がスキになってた。運命なのかな。」

「運命…そうかもしれない」

2人は手を繋いで歩く。

夏と冬也の想いを乗せて。

空はカラっと晴れたあの日の空のようだった。

エピローグ

人の心は空のよう。

晴れたり、曇ったり、雨が降ったり。

人は晴れが一番いいと思うだろう。

だが、一つでもかけてはいけない。

曇りがなきゃ日を浴びすぎてしまう。

雨がなきゃ水がなくなってしまう。

全てをバランスよく。

雨が降り続いた心は苦しみであふれそうになる。

けど雨に負けたら防波堤がくずれ、何もかもが台無しになる。

我慢することも大切なのだ。

しかし雨の波に飲み込まれても手をのばし必死に救ってくれる人がいれば心はまた生き返る。

夏と冬也のように我慢して我慢して我慢して我慢すれば

きっと夏美と東弥のような人が手を差し伸べてくれるだろう

そしてやっと心は晴れる

綺麗な虹も出るだろう

『あの日の空』を読んでいただき本当にありがとうございます。初小説でごちゃごちゃしてしまいましたが、楽しく書くことができました。
この小説は戦争をテーマにしました。戦争は残酷ですね。人の意味がわかってない。もう二度と起きないようにしたいですね。
人に自分の小説を読まれるってとても嬉しいことです。私は皆様に読んでいただいて本当に嬉しかったです。小説を読むと世界が広がるって言いますからね。これからもいっぱい読んでください。
それから今心に雨が降ってる人。
あなたの雨が早くあがるよう祈っています。
我慢すればきっとあなたに手を差し伸べてくれる人が現れますよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6595a/

あの日の空

2010年10月22日11時07分発行